

## ヘルマンハーブに 魅せられて

梶原千沙都

ヘルマンハーブ——。健常者だけでなく、障碍のある人や体が弱く機敏な動作の叶わない人、五線譜が読めない人など、誰もが手軽に演奏できる弦楽器です。

私は、二〇〇四年から日本でのヘルマンハーブの普及を主とする音楽事業をスタート。演奏活動の傍ら、まだ存在しなかった奏法を編み出してきました。いまでは演奏者は全国で三千人以上。教室も百四十を超えるまでに知名度を上げました。

ヘルマンハーブとの出逢いは、夫の海外赴任中の二〇〇三年に訪れたドイツの介護福祉用品の見本市のこと。一人の老人に「誰でもすぐに弾けるのよ、綺麗な音なのよ」と声を掛けられ、ついていくと、一台の木製弦楽器がありました。弦を弾くと澄んだ美しい音色が響きます。同時に、弦の下に差し込んだ譜面に沿って示されたとおりに弾けば簡単に音楽が奏でられることに驚きを隠せませんでした。

しかし、その頃の私は音楽を  
楽しむ心の余裕はありませんで

した。十八歳の娘が脳下垂体腺腫という難病にかかっていたのです。ヘルマンハーブへの関心はその場限りとなっていました。

その後、娘の手術のために日本へ一時帰国。再びウィーンに戻りますが、そんな折に夫の帰任が決まり、私は娘と二人、ウィーンに残ることになりました。病気が病気だけに娘の体調のことが頭から離れませんでした。

が、手術を終えた頃から何となく気持ちが落ち着き、霧が晴れてきたような感覚になりました。以前聴いたヘルマンハーブのことを思い起こし、何かに導かれるようにして開発者のヘルマンさんを訪ねたのはその頃です。

ドイツ南部バイエルン州の農場主であるヘルマンさんは、ダウン症の息子さんが自分で奏でられる楽器を、との思いからヘルマンハーブを開発。その美しい姿と音色はたちまち村中の話題となり、自宅の作業場で製造をスタートさせたのです。

ヘルマンさんを訪ねた翌日、氏の紹介であるクリスマスコンサートに足を運びました。すると、そこには奇跡のような景色が広がっていました。ヘルマンハーブの楽団では、障碍者も健

常者も、若者もお年寄りも、皆が一緒に演奏をしていたのです。皆が同じ楽器を持って、美しいメロディーを奏でている。ヘルマンさんの「障碍のある子を持つ親の心」の偉大さに感銘を受けずにはいられませんでした。

そして、こう思ったのです。「ヘルマンハーブという同じ楽器を持ち、皆が自信に満ち溢れて輝いている。きつとここでは、すべての垣根が取り払われているのだ。これを演奏できたら、人生が変わる人がたくさんいるに違いない」と。そして何より、私自身が日本人で初めてこの楽器を目にした人間だと知らされ、自分の手でヘルマンさんの真実の愛の生き方と、この素晴らしい楽器を日本に広めたい、と心に誓ったのでした。

「世界的に有名にするつもりはない」というのがヘルマンさん一家の意向でしたが、私は「あなたの子供を、一人分けてもらったような気がしました」とヘルマンハーブを手にした時の感動を伝え、普及のための理解を求めました。嘘偽りのない思いが通じたのか、ヘルマンさんからヘルマンハーブを導入する施設を紹介された研修生として、

障碍者の方との接し方や、ヘルマンハーブの施設での活用について勉強しました。

娘の術後経過は決して順調とはいえず、不安の中でしたが、難病と向き合う娘の姿と自立のために努力する障碍者の方の姿が重なり、ヘルマンハーブの普及という目的は私にとって一筋の希望の光となりました。

本格的に事業として始めようと思った私は、まだ一般的ではなかったインターネットや国際電話を駆使し、事業計画の策定に着手。二〇〇四年に帰国すると、プロモーションを兼ねた演奏会やワークショップを催しながら、日本の音楽教師を募集。八畳一間の事務所事業を始めたのです。

私は当初、ヘルマンハーブを広めるにはまず障碍者の間から、という思いがありました。しかし、それではなかなか結果は得られませんでした。そんな時、ある人がこうおっしゃいました。「福祉の現場で普及したいというのとは分るけれど、ハンカチつてね、真ん中をつまめば端まで持ち上がるでしょ」

まずは、やりたいという人ターゲットを絞っていけば、結

果は自ずとついてくる——。その方の一言がきっかけとなり、障碍のあるなしにかかわらず参加できる教室の展開に事業を切り替えると、シルバー層を中心に思わぬ広がりを見せました。

ヘルマンハーブを広げる上でのもう一つの壁。それはそれまでなかったヘルマンハーブの奏法を確立し、芸術としてのステータスを上げることでした。ヘルマンハーブをより美しく演奏するには、演奏の姿勢や手の形などを整え、指導に一貫性を持たせることが重要です。私はそこに何らかの規則性があると確信しました。しかし、奏法本は本場のドイツにすら存在しません。そこで楽器の特徴などを一から見詰め直し、年間三千人以上の人に教えながら、またソロの奏者として演奏技術を研究する中で、奏法を編み出すことができましたのです。ありがたいことにこの理論はドイツでも高く評価され、世界的な奏法として体系化されるまでになりました。

日本にヘルマンハーブを普及して十二年の時が過ぎましたが、日本でのヘルマンハーブの発展はヨーロッパでのヘルマンハーブの地位を確立する大きなきつ

かけとなりました。ヘルマンハーブはヘルマンさんの子を想う心から生まれ、国境や世代を超えて受け継がれるべき本物の楽器です。これからもバリアフリー性という原点を見失わぬよう、そしてヘルマンハーブの芸術性や音楽性を求めて人生を輝かせたいと思っている人にも光を当てながら、舵取り役としての役割をまっとうする覚悟です。  
(かじわら・ちさとⅡ日本ヘルマンハーブ振興会会長)